

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-48350

(43)公開日 平成10年(1998)2月20日

(51)Int.Cl.⁶
G 0 4 B 29/00
29/04
37/00

識別記号

府内整理番号

F I
G 0 4 B 29/00
29/04
37/00

技術表示箇所
A
B

審査請求 未請求 請求項の数1 FD (全3頁)

(21)出願番号 特願平8-217843

(22)出願日 平成8年(1996)7月31日

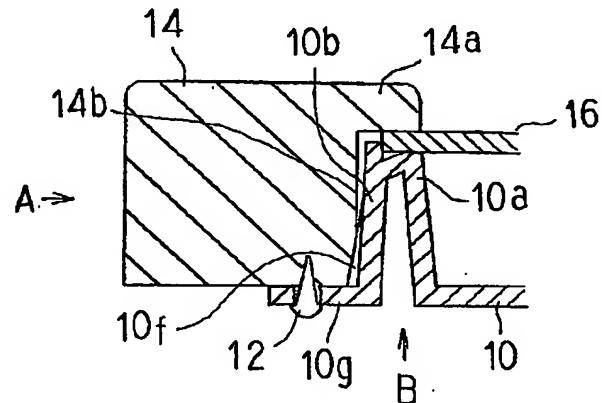
(71)出願人 000115773
リズム時計工業株式会社
東京都墨田区錦糸1丁目2番1号
(72)発明者 小平 恵一
埼玉県北葛飾郡庄和町大字大金496 リズ
ム時計工業株式会社庄和工場内
(74)代理人 弁理士 川井 興二郎

(54)【発明の名称】 時計前板取付構造

(57)【要約】

【課題】 木枠の寸法のバラツキによる中心位置のずれや木枠の割れを防ぐと共に、より大きな寸法のバラツキにも対応可能にすることを課題とする。

【解決手段】 バネ性を有する舌状部10eは前板10の外周部10aに切り込みを入れることにより形成されている。この舌状部10eの外側面10aには食い込み部10fが形成されている。木枠14に前板10を嵌め込んで食い込み部10fを木枠14に食い込ませる際に、舌状部10eのバネ性により過大な応力が木枠14にかかるのを防いでいる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 木枠に前板を取り付けた木枠時計において、前記木枠に当接する前記前板の外周部にバネ性を有する舌状部を設け、該舌状部に形成した食い込み部を前記木枠に食い込ませることにより前記木枠に前板を隙間なく取り付けることを特徴とする時計前板取付構造。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、木枠に前板を取り付け、この前板に機械体等を取り付けてなる木枠時計における前板取付構造に関する。

【0002】

【従来の技術】 従来のこの種の時計における前板の取付構造は、図6及び図7に示すようなものであった。即ち、図6及び図7に示すように、従来の前板2は、その外周に略V形状に屈曲して時計前方(図中上方)に突出する外周部2aを有し、またこの外周部2aの外側面2bにくさび状の食い込み部2cを有し、更に、外周部2aの端部から略直角且つ外方に屈曲した固定部2dを有する。この前板2を木枠4に取り付けるには、木枠4の背後(図中下方)から外周部2aを木枠4内に嵌め込み、このときにガラス6を外周部2aの前端と木枠4との間に挟み込み、更に固定部2dの穴2eを介してネジ8を木枠4に取り付けて固定している。

【0003】 通常、木の加工及び収縮等により木枠4の内周面と前板2の外周部2aとの間の隙間Gには、設定した寸法に対して0~2.5mm程度のバラツキが生じる。このようなバラツキをそのままにしておくと、木枠4の中心とこの木枠4に嵌め込んだ前板2の中心とがずれてしまうことになる。このため、隙間Gのバラツキを小さくすることが望まれていたが、それは極めて困難なことであったので、従来は前板2の外周部2aに食い込み部2cを設け、隙間Gのバラツキを食い込み部2cの食い込み量で調整することにより木枠4と前板2の中心を合わせていた。また、この食い込み部2cは木枠4と前板2をネジ8で固定するまでの仮止めとしての機能もあるものだった。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 上記従来の前板の取付構造においては、隙間Gのバラツキにより、設定した寸法よりも実際の隙間Gの寸法が小さい場合、食い込み部2cの食い込み量を大きくすることが必要となる。この場合、木枠4にかかる応力が過大になり、木枠4の接着部が割れたり、前板2が変形して中心位置がずれてしまうことがあった。

【0005】 本発明は、上記従来例の課題に鑑みなされたもので、その目的は、木枠の寸法のバラツキによる中心位置のずれや木枠の割れを防ぐと共に、より大きな寸法のバラツキにも対応することが可能な時計前板取付構造を提供することにある。

【0006】

【課題を解決するための手段】 本発明の時計前板取付構造は、木枠に前板を取り付けた木枠時計において、前記木枠に当接する前記前板の外周部にバネ性を有する舌状部を設け、該舌状部に形成した食い込み部を前記木枠に食い込ませることにより前記木枠に前板を隙間なく取り付けてなるものである。

【0007】

【発明の実施の形態】 本発明の時計前板取付構造においては、前板の外周部にその外周部に切り込みを入れることによりバネ性を有する舌状部を形成している。また、この舌状部の外側面には食い込み部が形成されている。この食い込み部は、バネ性を有する舌状部に設けられているため、木枠に前板を嵌め込んで食い込み部を木枠に食い込ませる際に、舌状部のバネ性により過大な応力が木枠にかかる 것을防ぐことができる。

【0008】

【実施例】 図1は本発明の一実施例に係る時計前板取付構造を示す断面図であり、図2及び図3は図1に示す前板のA矢視図及びB矢視図、図4は図3に示す前板のA-A断面図、図5は図2等に示す前板の要部斜視図である。

【0009】 図1等に示す前板10は、硬質プラスチック等からなる略板状をなすもので、その外周には前述した従来例と同様の略V字形に屈曲して時計前方(図1中上方)に突出する外周部10aが設けられている。この外周部10aの外側壁10bには、時計後方(図2中下方)より形成された2本の切り込み10c、10dにより後方の端部を外周部10aから切り離すことによりバネ性を有するように形成される舌状部10eが設けられている。また、この舌状部10eの外側面にはくさび状の食い込み部10fが設けられている。更に、外周部10aの外側壁10bの端部には、略直角且つ外方に屈曲された固定部10gが設けられており、この固定部10gにはネジ12を挿入するための穴10hが設けられている。尚、舌状部10eと食い込み部10fは、前板10の外周部10aにバランスよく複数形成されており、その数は木枠14の形状や大きさに合わせて任意に設定することが可能である。

【0010】 この前板10を木枠14に取り付けるには、前述した従来例と同様に、木枠14の背後(図1中下方)から外周部10aを木枠4内に嵌め込み、このときにガラス16を外周部10aの前端と木枠14のフランジ部14aとの間に挟み込み、更に固定部10gの穴10hを介してネジ12で木枠14に固定する。このように前板10を木枠14に取り付ける際に、食い込み部10fは木枠14の内周面14bに食い込んで木枠14の内周面14bと前板10の外周部10aとの間の隙間を埋める。このときに、舌状部10eは、そのバネ性により適度に内方に彎曲し、木枠14の内周面14bと

前板10の外周部10aとの間の寸法のバラツキにより過度に食い込み部10fが木枠14に食い込んだり、過大な応力が木枠14に加わることを防止する。また、外周部10aに設けられた複数の舌状部10eと食い込み部10fが、それぞれ隙間寸法のバラツキに対応するよう木枠14に食い込むと共に彎曲することになる。このため、隙間寸法のバラツキが全周の各方向で異なる場合にも、舌状部10eと食い込み部10fが個々に対応し、容易に木枠14の中心と前板10の中心を合わせることが可能である。また、外周部10aに同形状で複数の舌状部10eがバランスよく配置されているので、各々舌状部10eと木枠14の圧力がいずれも均一状態となり、隙間Gが小さくても前板10を破損することなく、木枠14と前板10の中心の調整をすることが可能である。

【0011】

【発明の効果】本発明によれば、木枠に食い込む食い込み部をバネ性を有する舌状部の外側面に設けているので、食い込み部が食い込むことにより木枠にかかる応力を低減することができ、木枠の割れを防ぎ、容易に木枠と前板の中心を合わせることができる。

【0012】また、外周部に同形状で複数の舌状部がバランスよく配置されているので、各々舌状部と木枠の圧

力がいずれも均一状態となり、隙間Gが小さくても前板を破損することなく、木枠と前板の中心の調整ができる。

【0013】更に、食い込み部が食い込む量だけでなく、舌状部が彎曲可能な範囲で木枠と前板間の隙間のバラツキを調整することができるので、より大きな寸法のバラツキにも対応することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施例に係る時計前板取付構造を示す断面図である。

【図2】図1に示す前板のA矢視図である。

【図3】図1に示す前板のB矢視図である。

【図4】図3に示す前板のA-A断面図である。

【図5】図2等に示す前板の要部斜視図である。

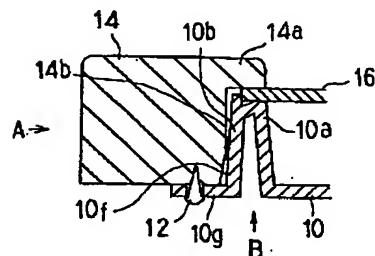
【図6】従来の時計前板取付構造を示す断面図である。

【図7】図6に示す前板の要部斜視図である。

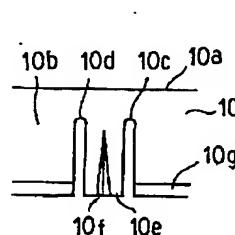
【符号の説明】

10	前板
10a	外周部
10b	外側壁
10e	舌状部
10f	食い込み部
14	木枠

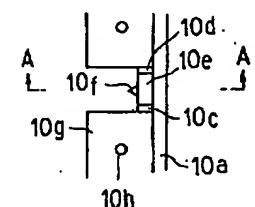
【図1】



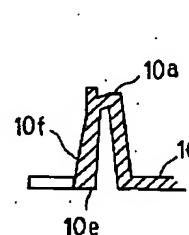
【図2】



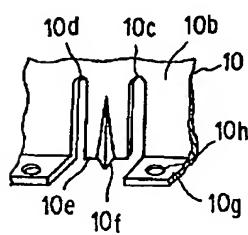
【図3】



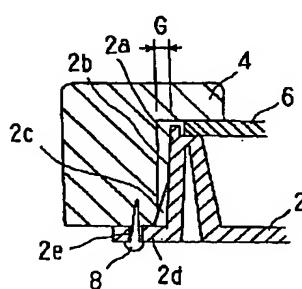
【図4】



【図5】



【図6】



【図7】

